

経済学部、彦根、そして この地における勉学・研究・教育

滋賀大学における研究・教員生活を
振り返って

神山進

Susumu Kouyama

滋賀大学 / 名誉教授

I はじめに

この回想が『彦根論叢』第400号発刊記念号に掲載される頃は、私は定年を迎えて大学を去ったばかりである。退職を迎えるにあたっての『退官記念号』を辞退した経過もあって、この発刊記念号に「滋賀大学における研究生活や教員生活を振り返るエッセイ」を執筆することになった。

ただし、執筆依頼内容の「学究生活を振り返って滋賀大生に伝えたいこと」からは大きく離れ、あくまでも滋賀大学における私の学生時代の生活と、その後の教員としての研究・教育史を、僭越にも展開させていただこうと思う。おそらく大半の内容は私の個人的経歴の自己回想であり、自分という人間の経済学部にかかわる記録の一部をしたためておきたかったという動機によるところが大きい。しかしその中に、学生生活を送る滋賀大生にとって、多少とも示唆的なものがあればと願っている。

II 学生運動と滋賀大学経済学部における学生生活

—いろいろ考えるとところはあったが、
私は傍観者であった

私が滋賀県立膳所高等学校を卒業して滋賀大学経済学部に入學したのは、昭和43年(1968年)4月であった。私の学生の時期は、学生運動(学生が集団的・組織的に行う政治・社会・文化などに関する運動で、民主主義あるいは社会主義思想の隆盛にともなって盛んになった運動)や大学紛争(大学の在り方に不満を抱く学生と大学当局との間で起こった紛争)が最も激しかった時期であった。確かに昭和44年9月に大学紛争は警察力で解体させられるが、全国大学の各全共闘(全学共闘会議)と革マル(日本マルクス主義学生同盟革マル派)を除く新左翼八派が集まり全国全共闘

が結成され、その一部は過激グループや住民運動などに入り込んでいった。

経済学部においても、大学封鎖、学生デモ（示威行進）、学生と大学当局との団交（団体交渉）、警察機動隊と学生グループとのにらみ合いなどが頻繁に発生した。大学で授業ができず、近くの寺院や教会などで授業を受け、そこに投石を経験したこともあった。私は学生運動に直接かかわることはなく、あくまでも傍観者としてのノンポリ的（政治問題や学生運動に直に関心を示さない）存在であった。しかし、どこに向かうという方向性はわからなかったが、自分と同時期の若者が示す強力なエネルギーのようなものは感じる事ができた。当時、大学の裏門を出たあたりには、いくつかの食堂やマージャン屋が点在していた。大学が封鎖されて休講になると、裏門近くのマージャン屋や食堂で“たむろ（屯）”したこともあった。

3年生になると、ゼミ活動が始まった。私は経済学科の学生であったが、学科の縛りはきつなくなり、自由にゼミを選ぶことができた。この伝統は、現在の6学科から構成される経済学部を引き継がれたよい伝統である。私は経済学部に学びながら、当時から心理学に強い関心をもっていた。人間の劣等感が学びたい学問を決めるといわれることもあるが、中学・高校生時代、多少ともガリ勉タイプであった私は、人との付き合いがどちらかといえば苦手であった。そのようなことが、心理学への関心を高める要因であったかもしれない。私は、人間関係論や労務・人事管理論を学ぶ進藤ゼミ（進藤勝美教授のゼミ）に所属することになった。卒業論文のタイトルは、「組織における人間関係」であった。

Ⅲ 神戸大学大学院時代の学生・研究生活

—経営学研究科でドイツ経営学のゼミに所属したが、心理学に強い興味をもち続けた

滋賀大学経済学部の卒業にあたって、一般企業に就職をするか、大学院に進学をするか、迷った時期があった。というのも、大学4年生の時に父親が病死し、家族から一般企業への就職を望まれていたからである。しかし大学院への進学は3年生の初めより希望しており、そのための試験準備もしていた。経済学部の吉田修教授には受験科目（ドイツ語）を専門原書で講読する時間を割いてもらっていた。結果として企業への就職をやめ、神戸大学大学院経営学研究科修士課程を受験し、進学することになった。指導を希望した先生は、滋賀大学の母体、彦根高商（旧制の高等商業学校）のOBにあたる、ドイツ経営学の権威、市原季一教授であり、吉田修教授の研究の恩師でもあった。この吉田、市原両教授との出会いは、その後の私の人生を大きく決定づけることになった。

市原教授のもとにはドイツ経営学を学ぶ多くの院生が所属していたが、私だけはアメリカの経営管理論、特に心理学に興味があるということで、経営組織の社会心理学を研究することが許された。そして修士論文「カツ・カーン；組織の社会心理学」を書きあげた。なお修士課程を経て、引き続き博士課程に進学したが、博士課程1年生の8月に、母校の滋賀大学経済学部併設されていた経済短期大学部に教官として就職の道が開かれ、経済的に苦しかった私は何ら迷うことなく、8月1日に助手として赴任することになった。経済短期大学部は現在の経済学部夜間主コースの母体になった3年制の夜間短期大学であり、当時としては他の国立大学にも存在し、私学でいうところの2部（夜間部）に該当した。

IV 私の趣味

—服飾デザイナーとしての活動

大学院に進学するか、一般企業に就職するかを迷った時期があったことは上に述べた。実はその理由は、大学在学中に父親を亡くしたことだけではなかった。実は大学3回生の4月から、夜間部であったが、京都に所在した各種学校(服飾学院)で婦人服作りの勉強を始めていた。したがって昼間は滋賀大学で、夜間は服飾学院で学ぶというダブル・スクールを行っていた。婦人服のデザインやファッションに興味をもったのはそれほど以前からではなく、大学に入ってからである。母親が私の子供の頃から婦人服の誂え(あつらえ)、つまり注文を取って婦人服の仕立を行っていた。規模の大きな仕事としてよりは、身近なご婦人を対象にして、自分の家で生計を助ける程度に注文服を作っていた。私も小さなころよりミシンを走らせる母親の姿や仮縫い(本仕立ての前に体型に合わせて仮に縫うこと)の姿をよく目にし、また自分自身でミシンを触ることも多かった。おそらく服づくりや服飾デザイナーに興味をもったのも、このような背景が原因したかもしれない。そのようなことから、特に服飾業界に就職したいという夢もあり、大学院進学か企業就職かを迷ったのである。結果的にこのような迷いは、大学院進学後も続いた。神戸大学大学院時代も、服飾学院(昼間部)とのダブル・スクールや短い期間ではあったが民間企業でのデザイナー経験も行った。

経済短期大学部への就職後は、全国的な組織であるデザイン文化協会に所属し、あくまでも趣味としてはあったが、おおむね年1回、比較的近年まで、婦人服創作デザインの発表を続けることになった。

V

滋賀大学経済短期大学部での 教員生活の始まり

—夜間授業を回顧して

私の教員(かつては教官)としての出発は、上述したように昭和49年(1974年)の8月、滋賀大学経済短期大学部の助手からであった。それ以降、平成5年(1993年)の経済短期大学部の廃止まで、3年制の夜間学生の指導と教育に約20年間従事した。この間、昭和51年(1976年)に講師、昭和54年(1979年)に助教授、平成2年(1990年)に教授に昇進した。授業は夕方の17時30分より19時、19時10分より20時40分までの2時間で、夜中から朝方にかけて研究する私の夜型生活とうまく適合していた。

現在運行されている経済学部と彦根駅との間の通学バスの実現は、まことに画期的なことであった。徒歩で20~30分の通学時間は、それほどキツイものではないが、不便さも伴っていた。私が経済短期大学部にいた時期は、もちろんバス運行は行われておらず、彦根駅から経済短期大学部までは、歩き、自転車、自家用車、あるいはタクシー利用のいずれかであった。私の自宅は天津の石山にあり、自宅で仕事をするを常としていたため、午後3~4時頃に家を出て、JRで石山駅から彦根駅に向かい、彦根駅から大学までは急ぎの要件がない限り徒歩で通学した。特に授業が終わって帰路につく彦根城近辺の四季の景色では、桜の夜景、春を喜ぶ観光客、お堀の水鳥、城に生息する野鳥の合唱、うだる暑さ、紅葉の城内外、吹きさらしの寒風と静けさ、豪雪の夜道、雪に埋まる彦根城、春を待ちわびる木々・草花など、今でも記憶に鮮明なものが多い。経済短期大学部の教育理念は、その後、経済学部・夜間主コースに受け継がれている。当時より今日に至るまで、有職者や一般社会人の

再教育・生涯教育の場として、また経済的理由より昼間に働かねばならない若者への学習機会の場として重要な役割を果たし続けている。ただその一方で、定員確保などの理由のために、必ずしも目的にかなっていないとはいえない学生も抱え込むことになり、夜間教育の重要性との間で板ばさみを経験し続けている。

私が接した経済短期大学部生の多くは、きわめて真面目な青年たちと、数は必ずしも多くなかったが、それら青年のお手本になるような社会人であった。特に年配の社会人は、様々な人生経験を経て再度勉学したいという明確な目的意識をもった人たちであった。そしてそのような社会人に対して教鞭をとる若輩の自分に、未熟さを感じることも多かった。大学院では研究の仕方を教わったが、講義の仕方までは教わず、そのまま教壇で学生の前に立った。話が途中でうまくいかず、冷汗をかいたこともしばしばであった。人前で話すということはよほど話の内容に習熟していないとうまく話せるものではない。私も講義の前、かなりの時間を割いて準備をしたが、予定していたように話せず、途中で混乱をきたすこともあった。おそらく年配の社会人学生は、そのような混乱を見抜いていたことであろう。人それぞれには、話し方やそのテンポ、話し言葉や多用するいい回し、間の取り方や抑揚などに独特の“くせ”がある。そして非常に聞きやすい“くせ”もあれば、逆に聞きにくい“くせ”もある。大学で教壇に立つ前後に、一度じっくり自分の話し方全般について専門家のアドバイスを受ける機会があればよいのかもしれない。私にとって講義や講演のように人前で話しをすることは、65歳の定年を迎えるまで、必ずしも得意とするところではなかった。

なお、経済短期大学部時代の成果だと考えられるのは、昭和57年(1982年)の10月より行ったミシ

ガン州立大学大学院への在外研究(10か月間)であろう。当時の私の研究課題は大学院時代の「組織の社会心理学」から発展して、「経営産業心理学」の様々な領域に拡大していた。特に私の関心が高かったのは、「マーケティングと消費者の心理」であり、さらにそのような領域の研究を「装いと流行の心理」を焦点に進めていた。ミシガン州立大学では人間／社会生態学部(college of human ecology)のクリークモア教授(Prof. Creekmore, A.M.)の下で、「装い・流行と人間行動」の研究に従事した。そしてこの在外研究の成果を数冊の本にまとめることができた。

VI 装いと流行の社会心理学

—装いと流行の心理学関係では、
一定の研究成果と博士の学位取得ができた

「装いと流行の社会心理学」に関しては、装いや流行が人間に対して及ぼす3つの機能に着目して研究を行った。3つの機能とは、装いによって自分自身を確かめ、強め、また変えるという「自己の確認・強化・変容」機能、装いによって他者に何かを伝えるという「情報伝達」機能、装いによって他者との行為のやりとりを調整するという「社会的相互作用の促進・抑制」機能である。単著、共著を含めて多くの論文を執筆し、学術雑誌に掲載した。また著書も多く刊行できた。単著としては『被服心理学』(光生館)、『衣服と装身の心理学』(関西衣生活研究会)である。また関西大学の社会心理学者、高木修教授や他大学の多くの研究者とともに「装いの社会心理学研究グループ」を立ち上げた。高木修教授との出会いは、社会心理学にかかわる、その後の私の研究の基幹となった。そして次のようなさまざまな編著書や監訳書を刊行した。編著としては『被服と化粧の社会心理学』(北大路書

房)、『被服行動の心理学〔人間行動学講座第1巻〕(朝倉書店)、『被服行動の社会心理学〔シリーズ21世紀の社会心理学第8巻〕(北大路書房)、監訳書としては『被服と身体装飾の社会心理学』(北大路書房)、『外見とパワー』(北大路書房)などである。これらの中で、ミシガン州立大学での文部省長期在外研究の成果であった『被服心理学』は、後に刊行した『消費者の心理と行動』と合わせて、博士の学位取得(京都大学)の対象になった。さらにこの研究領域では、共著として、次のような書物の刊行にかかわった。『記号と情報の行動科学〔応用心理学講座第4巻〕』(福村出版)、『経営産業心理学パースペクティブ』(誠信書房)、『経営心理学トピックス100』(誠信書房)、『社会心理学への招待』(有斐閣)、『社会心理学研究の新展開』(北大路書房)、などである。なおこれらの研究成果に対して、論文賞や功績賞などの学会表彰を受けた。

VII 経済学部および 大学院経済学研究科における教育 —特に学部のゼミ教育・活動に力を注いだ

平成5年(1993年)に、滋賀大学経済学部全学科および併設の経済短期大学部が改組され、社会システム学科が増設された。そして経営学科、会計学科はそれぞれ企業経営学科、会計情報学科と名称を改め、経済学科、ファイナンス学科、情報管理学科とともに6学科体制が始まった。また昼夜間開講制の社会人コースが設けられ、既述の通り経済短期大学部の夜間教育理念はそれに引き継がれることになった。

私についても平成5年に配置換えとなり、以降20年間にわたる経済学部教員としての生活が始まった。近年の経済学部の変化、特に私の学生時

代からの大きな変化は、女子学生の増加である。私が学部生の頃は、もちろん現在と比べて定員数も異なるが、女子はわずかに数える程度に過ぎなかった。しかし現在では、一学年の学生定員が600名に近づく数値(国立大学の中では最大規模)になり、それに比例して女子学生の数も三分の一近くになっている。そして近い時期には、男女の学生数がそれぞれ半数になることが予想される。

多くの女子大学生は、大学卒業後、民間企業や行政機関への就職を希望している。良妻賢母型女子教育の時代は終焉し、働く女性という意識変化が経済学部における女子学生の増加の根底にある。このような男女構成比率の変化の中で、従来の男子中心の硬派的学風から男女が共に学ぶソフトな学風の経済学部に変化しつつある。スポーツや文化活動にかかわる各種クラブ・同好会・サークルに活躍する女子、就職活動において男子以上に活発な女子学生、などもこのような変化の一環である。従来の男性的視点に、ソフトな女性的視点を融合させた新しい経済学部が実現しつつある。

学部の授業では、特にゼミ(専門演習)の教育や活動に力を注いだ。なぜならば、ゼミ運営は、学生たちと直に接することができる場だったからである。講義では、多くの学生が聴講しても、なかなか学生一人一人の顔を見ることは難しい。毎年11月になると新ゼミ生を募集する。私のゼミには比較的多くの学生が応募してくれた。男女おおむね半数ずつ採用したが、ゼミ数の上限が設定されるまでは、3・4回生のゼミ学生数が合計60名近くになることもあった。ゼミでの文献研究、学生の発表、ゼミ合宿、ゼミ旅行といろいろ行っただが、“今年は十分うまく運営できた”と感じる年度は必ずしも多くなかった。ただ毎年のことであるが、若い学生た

ちの新鮮なエネルギーに接することができたことは、大変幸せであった。

また私にとって、大学院教育も意義あるものであった。特に経済学研究科の博士前期課程（修士課程）には、日本人の若者や年配の社会人、中国、台湾、ベトナムからの留学生など、多様な院生を指導することができた。ただ大学院教育の中で、最初は学生が日本人を含めて多様であったが、徐々に中国人学生が圧倒的に多くなり、大学院入試に何らかの改善の余地ありと感ずることもあった。大学院の論文指導では実証的データに基づく仮説検証型の方法（科学的方法）を採用し、学部ゼミがおおむね文献研究をベースにした方法であったことに比べて、それはより自分の研究方法に近いものであった。毎年、主として調査や実験による実証的データをベースにして論文をまとめさせた。このような方法での論文作成は、経済学部ではどちらかといえば多くないが、今後とも誰かの教員が継続してほしいと願っている。

VIII 消費者行動の社会心理学

—消費者心理・行動については、
特にマーケティングとの関わりにおいて
研究を行った

消費者行動の社会心理学的研究の領域では、2冊の単行本を出版した。いずれも経済短期大学部から経済学部に移籍した後の仕事であった。『消費者の心理と行動—リスク知覚とマーケティング対応—』（中央経済社）と『性の消費行動—現代社会における性の商品化と商品価値—』（滋賀大学経済学部研究叢書第40号）である。

このうち『消費者の心理と行動』は、消費者心理・行動とマーケティングとの関係に関する学問的概要を前半に、そしてその具体的事例として、「流行とファッション・リスクの知覚」および「装い

の心理」関係で行われた実証研究の成果を後半にしてまとめた著書である。また『性の消費行動』は、人間の肉体的な性、ジェンダーという心理・社会的な性、そして男女間の恋愛に関わる性という3つの側面から、現代社会における性の消費行動を議論したものである。このような研究領域は、従来より未開拓な分野であったが、性にまつわる消費問題が多様な形で出現し、さまざまに話題を提供していることも、現代社会の顕著な特徴である。『性の消費行動』は、現代消費社会における消費現象や消費者心理・行動を語るうえで見過ごすことができない、性の消費という問題を提起した。

なお、私の関心が特に高かった「装いと流行の社会心理学」にかなりの研究時間を費やしてしまい、消費者行動や消費者心理全般にかかわる著書の出版に必ずしも十分な時間を割くことができないまま、定年を迎えた。この点は、大学在籍中における研究者生活の反省点といえるかもしれない。

IX 大学での講義と学生の私語

—講義中の学生の私語にどのように対応するか

講義中の学生同士の私語については、就任した20歳代後半より、年々、関心をもつ問題になっていった。というのも、私が滋賀大学に職を得た頃より、大学がいっそう大衆化され、多くの学生が徐々に大学に勉強以外のものを求め出したからである。大学は就職するまでの一過程、大学は青春時代を楽しむところ、大学ではクラブ／サークル活動こそが重要、大学時代のアルバイト熱中、大学は仲間を見つけて楽しむ場所、等々である。これらのことがすべて悪いといっているのではないが、要するに大学が勉強だけにいそむ所から、いろんなことを楽しむ一つに勉強がある、というように大学が大衆化、娯楽化してしまった。その結果として、講

義中に親しい仲間と隣り合わせに座り、講義の内容をあまり真剣に聞こうとせず、隣の友人と講義中に楽しく語らう学生が増えていった。結果として私語が増幅し、講義を真剣に聞こうとする学生や講義担当者に大きな負担を強いるようになった。特に、講義の話に興味がありませんと私語を繰り返し、あるいは堂々と教室の入り口から講義中に退出する学生も目立ってきた。思わず大声で学生に問い詰める場面もあった。要するに、多くの学生に興味をもたせ続ける「面白い話」をいかに継続的に行うか、なかなか難しい問題であった。

講義中の教室から私語を少なくする方法について、いろいろと試みた。講義開始の春学期や秋学期の初回に十分注意を促す、講義中に特に私語が目立つ学生を叱責したり教室から排除する、受講生がそれほど多くない場合は受講生の名簿に合わせた座席表を決める、等々である。しかし私が行った中でもっとも効果的な方法は、隣席をあけて座らせる方法であった。5人掛けの机の教室では、中央と両端に3人掛けにするやり方である。出席学生数が多くなって座れなくなるにしたがって、3人掛けから4人掛けに変更していく。それでも250名ぐらいの履修生は受講可能である。常に全員が出席するわけではないからである。春学期と秋学期の初めに、私語防止のためと明言してそのような着席方法をとってから、私語が激減した。仲の良い友人と座る場合でも、一つ離れて座るため、隣の友人と喋りにくくなったようである。講義が比較的静かで、快適になった。

X 私とお酒

—後に聞いた話だが、
若い時期は荒神山といわれていた

私が酒やタバコを始めたのは大学生になってか

らである。このうちタバコを始めるきっかけには、テレビドラマや映画の中でスターがかっこよくタバコをふかしている映像の影響があったかもしれない。その後、40歳代の半ばに禁煙するまで、市販の紙巻タバコからパイプで吸う葉タバコまでいろいろ経験し、大層なヘビー・スモーカーであった。他方、お酒を始めるきっかけは、経済学部生の前半に所属した運動クラブのコンパによって先輩たちに鍛えられたことによるであろう。お酒はその後今日まで、私にとって止めることができないものになっている。

今ではすっかりおとなしく飲んでいるが、若いころは荒神山（荒れる神山）といわれていたことを後に聞いた。荒神山（こうじんやま）とは、彦根近郊に所在する、近隣ではよく知られた山の名前である。中学・高校生時代の私は、多少ともガリ勉タイプであった。その影響だと思われるが、要するに私には対人的スキル、特に人と柔軟に話をする話術に欠けている側面があった。そしてお酒を飲んである程度酔いがまわると、自分の囲いを解いてうまく人と会話できたことから、つつい深酒をしてしまう癖があった。おまけに根っから酒の強いほうではなく、結果として酒で乱れることも多かった。要するに、若い頃はあまり良い酒ではなかったのである。荒神山、つまり荒れる神山とは、そのようなところから名づけられたのであろう。特に若い頃の私は、何か満たされないもの、自分自身で押さえつけているものがあつたようである。経済的な圧迫感や自分の将来への漠然とした不安、負けてたまるかというハングリー精神とその空回りなど、多くの原因があつたと思われる。荒れる神山は年齢を重ねるにつれて徐々に解消され、40歳代半ば頃よりおとなしい神山になった。しかしその反面、酒の影響が身体諸器官の機能低下にあらわされるようになっている。このように、本質的に酒が弱いわり

には酒好きのままで今日に至っているが、今では酒好きというよりも、酒によって身体や頭脳をマヒさせることが慣習化されているといったほうがよいかもしれない。定年を迎えて、酒との付き合いを見直す時期に来ているのかもしれない。

XI 在学生に伝えたいこと

—滋賀大生には可能性を求めて、
様々なチャレンジを行ってほしい

私が大学の教員になろうと決めたのは、大学院に進学してからである。その一番の理由は、対人関係にそれほど悩まされることなく、能力のみで自分の道を歩んでいけるであろうと考えたことによる。確かに若い頃の出来事を振り返ると、今では恥じ入ることのほうが多い。しかし私の名前の通り、何かに向かって(何に向かっていたのかわからない時もあったが)進んでいたことは事実である。その意味では、“なにくそ”というハングリー精神は確かにもち合わせていた。おそらくそのような精神は、受験戦争といわれた、とにかく数が多い団塊世代の私たちの青春にとって、負けてたまるかという競争心であったかもしれない。しかし興味深いのは、いろいろなことにチャレンジする中で、様々な人と出会い、それらの人が自分に大きなチャンスを与えてくれたことである。どちらかといえば人間関係が苦手な私が、その人間関係から今までの人生の中で大きなご褒美をもらえたということである。自分を理解し、受け入れてくれる人との出会いは、まことに貴重で価値がある。在学生には、是非とも多くのことにチャレンジしてほしい。その過程で出会える人々が、新しい自分の生き方を教えてくれるに違いない。

この40年間の教員生活を振り返って、滋賀大学の教職員の皆さんには、ともかくもお礼を申し

上げたい。そして在職中にいただいた多くの援助のおかげで教員生活を無事終えることができたことに、心から感謝したい。今後は、滋賀大学経済学部の一OBとして、経済学部のいっそうの発展と教職員皆さんのいっそうの活躍を期待し、また念じたい。

振り返ってみると、私と彦根との関わりは、小学校低学年の子供の頃にさかのぼる。当時、身体に大きな骨折を経験し、父親に付き添われて彦根の名接骨医のもとに長年にわたって通ったことが始まりである。私の住まいは当時も今も石山であり、石山駅—彦根駅間の所要時間は、当時の国鉄(今のJR)の鈍行列車で90分以上は要したと思う。その頃は、煙を吐いて走っていた自動車もあったように記憶している。もちろん当時は、今のような快速・新快速列車などは存在しなかった。父親に背負われては、長い時間、石山—彦根間を行き来した。そのようなことを考えてみると、そして経済学部の学生時代から今日までを考えてみると、私の人生は、この石山—彦根間を往復し続けた人生であったといえる。まことに彦根は、私にとって縁深い城下町であった。

最後に、本エッセイの執筆機会を与えていただいた、滋賀大学経済経営研究所および所長の筒井正夫教授に感謝の意を表したい。